

# 農山村の現状を踏まえた鳥獣被害対策の一体的実施のための検討調査結果概要

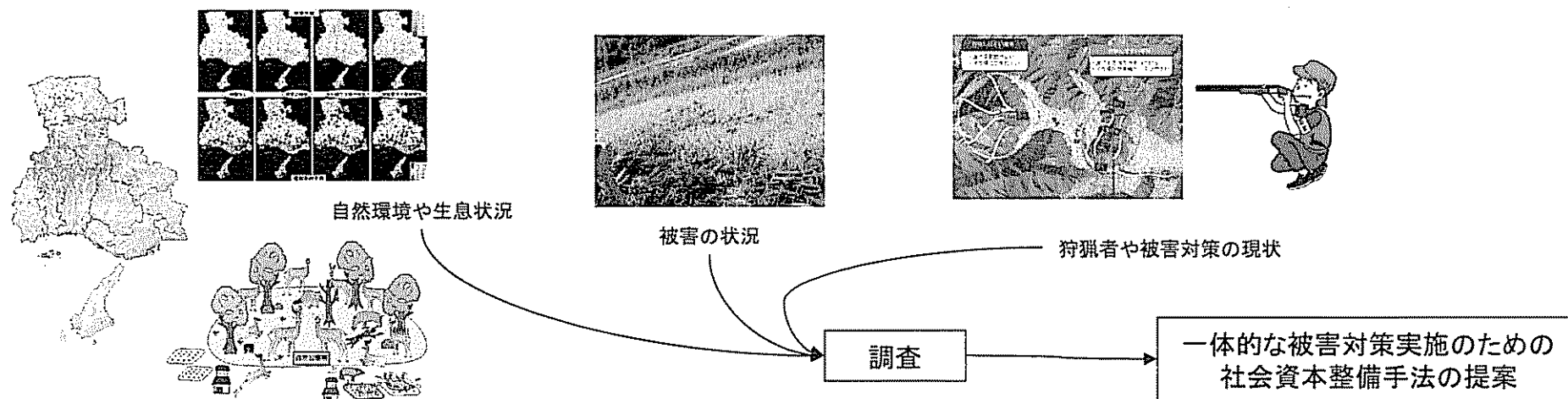
## 目的

- 農山村における鳥獣被害が深刻化している現状を踏まえ、効果的・効率的な鳥獣被害対策を促進するための事例検証を行い、社会資本整備の在方を検討した。

## 主な調査内容

- 被害状況、土地利用の変遷、狩猟者の広域的な集計調査(兵庫県を対象)
- 被害現場13地区の実態調査
- ツキノワグマ対策の現状調査
- イヌを活用した被害防除の検討
- 内外における野生動物対策事例の収集

など



## 主な結果

### (広域)

- シカ・イノシシの被害が広域的に深刻。
- 外来生物(アライグマ、ヌートリア)の分布と被害の拡大が著しい。
- 都市周辺では開発が進む一方で、中山間地域では耕作地の放棄や荒れ地から森林への回復が進んでいる。
- 対策の大きな役割を担っている狩猟者は、減少・高齢化が深刻な状況にある。

### (地域)

- 有害捕獲等に必要な施設や資材、捕獲個体の処分などの費用など、捕獲従事者の負担は大きい。
- 関係者に、野生動物の生息状況や管理方法に関する知識や技術が不十分な地域も多い。

### (全体)

- 地域の生産目標に基づき、防除プランを立て、地域的な協力のもと、正確な情報や知識に基づいて継続的に対策を行うことが必要である。

### (ツキノワグマ対策)

- ツキノワグマ対策に関しては、兵庫県では多数の出没の中、捕殺した頭数は少なかった。
- 出没するクマを捕獲し、人を怖がるよう学習させて放す「学習放獣」では、おおむね効果はあったが、一部再出没するクマもあった。
- イノシシ用のワナにより錯誤捕獲されたクマを放獣した際には、そのクマが人里に出没したり被害を出すことはなかった。

### (イヌの活用)

- イヌは従来から狩猟や獣害対策に用いられた歴史があり、現代の社会的条件の中で、活用されるよう方法論の確立が求められる。
- イヌを活用した対策には、法律や条例の確認や安全管理、飼育法や効果的な活用法などの課題を検討が必要である。

### (内外の対策)

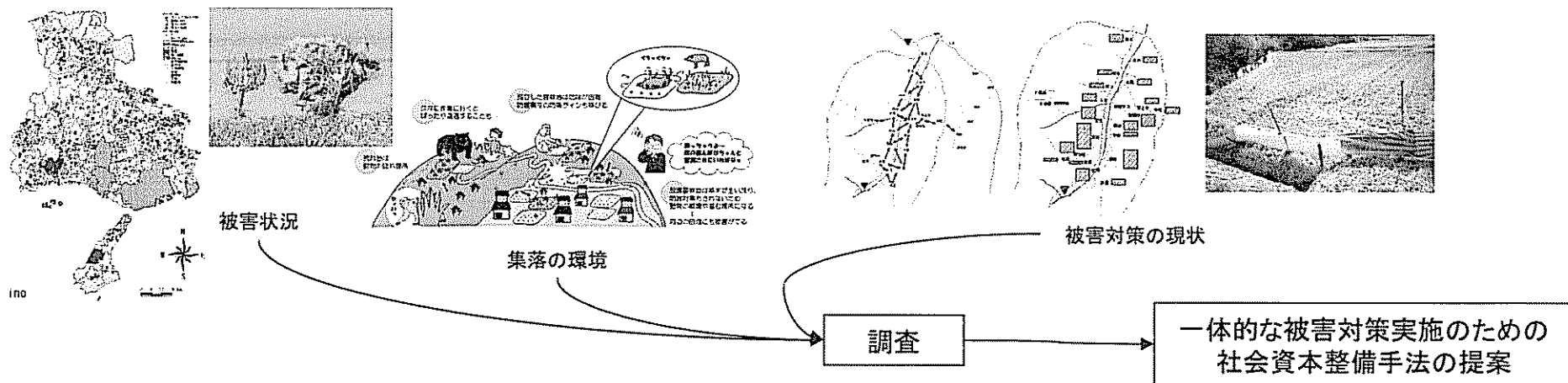
- 内外の事例は、ゾーニング、被害防除及び、加害個体除去の3つに分類し整理した。

目的

- 農山村における鳥獣被害が深刻化している現状を踏まえ、効果的・効率的な鳥獣被害対策を促進するための事例検証をおこない、社会資本整備のあり方を検討した。

主な調査内容

- 被害状況、土地利用の変遷、狩猟者の広域的な集計調査(兵庫県を対象)
- 被害現場13地区の実態調査
- ニホンザル追い払い事業の事例調査
- 防護柵設置事業の事例調査
- 内外における野生動物対策事例の収集 など



主な結果

(広域)

- シカ・イノシシの被害が広域的に深刻。
- 外来生物(アライグマ、ヌートリア)の分布と被害の拡大が著しい。
- 中山間地域では耕作地の放棄も出てきている。
- 被害が多い地域では、捕獲従事者に大きな負担がかかり、また、報酬も非常に少ない場合が多い。

(地域)

- 農村も過疎と高齢化が進み、被害対策のための人手や費用を確保するのが困難。
- 関係者に、対策のための知識や技術が不十分な地域も多い。
- (サル追い払い)
- 事業の説明や対応方法の指導が、住民への重要な役割を果たしている。
- 地域を挙げての追い払い事業で、効果は出ているものの、労力と費用の負担をいつまで継続できるかが課題。

(防護柵設置事業)

- 被害の深刻な地域では、個人的な柵の設置から、集落全体を囲う柵の設置へ移行している。
- 地域的な同意を得るのが困難な場所や、地形的に防護柵の設置が困難な地域もある。
- 適切にメンテナンスをしなければ効果が上がらない。
- 十分な知識や防除体制のもとに取り組んでいる地域では、効果が出ている。

(全体的に)

- 捕獲や追い払いと合わせて、総合的な対策を講じる必要もある。
- 農業者、捕獲班、行政の意思疎通と連携を十分にとる必要がある。
- 地域の生産や防除の目標を明確にし、計画的に対策を行う必要がある。